こんな三流はだめ
新聞や雑誌に書いていた

植草甚一

晶文社

著者について

植草甚一（うえくさ・じんいち）

一九〇八年東京日本橋に生まれる。早稲田大学建築科中退。一九三五年東宝入社（四八年退社）。現在フリーのライター、コラムニストとして各ジャンルにわたって活躍。日本ペンクラブ会員。

著書―『ジャズの前衛と黒人たち』『ぼくは散歩と雑学がすき』『ワンダー植草・甚一ランド』『雨降りだからミステリーでも勉強しよう』『映画だけしか頭になかった』『モダンジャズの発展』『衝突と即興』

訳書―チェスター・ハイムズ『ビンク・トウ』

こんなコラムばかり新聞や雑誌に書いていた

一九七四年五月三〇日初版
一九七四年七月一〇日二刷

著者植草甚一
発行者中村勝哉
発行所株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二―一―一二
電話東京二五五局四五〇一（代）・四五〇三（編集）
振替東京六二七九九
中央精版印刷・美行製本
ブックデザイン平野甲賀

© 1974 Jinichi Uekusa

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

植草甚一

こんなコラムばかり新聞や雑誌に書いていた

晶文社

塚崎真純氏に

カバー・本文写真＝樋口良

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

こんなコラムばかり新聞や雑誌に書いていた

J・J氏と神田神保町を歩く　7

海外読書散歩　15

ブックランド　103

ペーパーバックス 155
ミステリー・ガイド 231
中間小説研究 265

索引

J・J氏と神田神保町を歩く

「きょうは、どこに行こうかな……」
おそい朝。その日の計画を立てるJ・J氏の頭のなかには、六本木、三軒茶屋、神保町——と、いくつかの街の光景が浮んでいる。街の中心にはかならず、古本屋や洋書店がなければならない。あの本屋とあの本屋をまわって、それから、あの喫茶店でコーヒーを飲もう。多くの場合、J・J氏の外出スケジュールは、こんな風にきまってゆく。そしてやっぱり、J・J氏の足は、ゆたかな収穫の期待できる神保町に向かうことが多い。
神保町との付き合いは古い。もう四十年以上になるだろう。「市電が走ってましたよ。その窓ごしに、両側の古本屋の軒先を眺めていくんですけど、あっ、あの店に新しい洋書が入ったなっていうことが、すぐわかるんです」
——そして四十年。今日も、J・J氏は神田神保町を歩くことになった。
たくさんの古書店が軒をならべている。だがJ・J氏のめざす店は七、八軒にしぼられ、そのどれもが洋書の専門店である。三代つづいた老舗も多く、なかには一誠堂や松村書店のように、チャリングクロス・ロードあたりの古本屋にまで、名前のとおった店がある。これらの店では、主人みずから海外におもむき、貴重な古書を、ごっそりと仕入れてくるのだという。
J・J氏はまず、神保町の交差点を九段坂の方角へすこし歩き、「進省堂」をのぞいてみることにした。
「ここはいつも、ぼくに安く本を売ってくれた店です。主人の鴨志田さんと仲がよかったが、ついこのあいだ亡くなって、がっかりしました。いまは息子さんが一生懸命やっています」
白いカバーをかけた洋書の背に、書名と著者名と定価とが、毛筆で記されている。J・J氏は評論集の棚のまえに立ち、首から銀鎖で吊るしていた眼鏡をかけなおした。約五分後、「チョイト筋が通りすぎてますが」という註がついて、二冊、えらびだした。すなわちマイケル・シンクレア『ソンタグ』とD・ダイチェス『文学の批評的探究』、定価はどちらも五百円である。
ついで英文学関係の叢書の棚をざっと眺めたり、稀覯本（ボードレールの『悪の華』背革特製本、三万円！）を手に取ったりしたあと、フランス語の棚に移行して、ここでも三冊買う。
J・J氏の古本漁りには、ある種のジンクスのような

ものがある。すべからく積極策をとるべし。最初に入った店で、買おうかどうかと迷う本があった場合には、思い切って買ってしまうこと。

「そうすると、本のほうも喜んでくれて、それじゃいい本があそことあそこにあるから教えてあげようって、いってくれるような気がするんです。そんな日はわりと収穫があって、四、五十冊は手に入りますね。最初に、この本はまた次にしようって、ケチな気持で買わないときには、不思議に収穫がありません」

というわけで、つまり註釈づきで買ったはじめの二冊は、古本屋街の神さまを招きよせるための、私的なおまじないだったのだろう。眼鏡をはずし、買った本を店にあずけて、J・J氏はふたたび、いまにも大粒の雨が降りだしそうな、曇天の町に出る。

ブラリブラリと歩いて、そこから十軒ほど行くと、「東京泰文社」である。まず店頭の平台を漁る。縦に並んだ洋書の、崩れ、割れ、手垢にまみれた背中の横文字を、ものすごいスピードで判読し選別してゆくJ・J氏を見れば、だれしも息を呑むにちがいない。さすがに年期が入っているのだ。バーゲンセールの安本をバカにしてはいけない。ときによっては、なかなかの掘出し物が……

「ほらね、いいものがあった」

と、デヴィッド・ニーヴンの自伝『ムーンズ・ア・バルーン』を手に取って、J・J氏はつぶやく。ニューヨークのプットナム・サンズ社版のものが、わずか百円で買えたではないですか。

つづいてもう一冊。ジョージ・プリンプトンの『紙のライオン』である。ハーパー&ロー社のハードカバーが百五十円。

店内に入り、「タイム」誌のバックナンバーを調べて、そこから何冊か抜きだす。いそいで読みたい号だけ新刊で買い、あとは古本屋で補なうというのが、J・J氏のいつもの流儀なのだ。古本なら十円くらいで買える。ほかに「ニューヨーカー」や「エスカイア」も買い込む。「エスカイア」は大好きな雑誌で、できるだけ新刊を購入することにしているのだが、どうしても欠号が出てしまう。「これは持ってないなあ」と、今年の二月号を取りだす。表紙は、スティーブ・マックィーンとアリー・マックグロウ。男のほうは折れた腕を三角巾で吊り、女もまた、歯が欠けて眼が腫れて、凄まじいご面相である。暴力派サム・ペッキンパーの『ゲッタウエイ』出演がき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

っかけで、最近結婚したばかりの二人を種に、いかにも「エスカイア」らしい遊びぶりなのだ。

それから「テルケル」の三十二号（一九六八年）を買った。ちょっと高くて、四百円。フィリップ・ソレルス率いるところの、ヌーボー・ロマン派の理論機関誌である。みずから「ここに来るのがいちばん楽しみだ」というだけあって、J・J氏の発掘作業は、なかなか終りそうにない。

フランスの通俗作家ギイ・デ・カルの小説。去年の版だが、ここで買うと五百円で済む。『マックスとモリツ』というのは、ウィルヘルム・ブッシュの動物マンガ集で、四百五十円。さらに五百円の本が二冊。ダン・ジェンキンスの小説『セミ・タフ』と丹羽文雄の小説を英訳した『仏陀の樹』――

ペーパー・バックスを五冊。まだ終らない。レジのかたわらに積んである、まだ、値段のついていないペーパー・バックスの山を、片っぱしから崩してゆく。たちまち四冊。本当に、びっくりするほど早い。

こうして「東京泰文社」での成果は、単行本が十冊、ペーパー・バックスが十五冊、雑誌が約二十冊というところで、ようやくまとまった。店の主人が「タイム三冊分はおまけしておきます」というと、J・J氏は、「このあいだは、チョイト値切りすぎましたね」と舌を出した。

つぎに行ったのが「北沢本店」である。ここでも真っ先に、均一本の棚を見て、たちまち詩集を六冊ほど選んでしまう。「アメリカの現代詩人のものが沢山あります」と、J・J氏はご機嫌だ。どれも五百円均一。そしてジョン・ベネットのスリラー『ドラゴン』は三百円――

「この作家は、ぼくは知らないんです。すこし古いけれど、三百円なら、楽しみに読んでみましょう」

ここで買った六冊の値段は、しめて三千三百円だったが、三百円まけさせた。「近頃の若い人はあまり値切らないようですが、値切るのが本当なんです」といいながら、J・J氏はじつに堂々と値切る。それで浮いた分でコーヒーを飲み、タクシーに乗るのである。

J・J氏の両手の指は、本の埃で真っ黒になった。神保町の古本屋は、そのためのおしぼりをちゃんと用意してくれていて、その心づかいがうれしい。でも、値切る。「先生にあっちゃかないませんな」などと、本屋の方も、結構たのしそうにまけている。なんというか、実績のし

からしむるところであろう。

この「北沢本店」と道路をへだてた反対側の奥に、昔、銀映座という映画館があった。J・J氏は昭和十年に東宝に入社したが、その前はこの銀映座の主任をしていて、キング・ヴィダーの名作『ストリート・シーン』などを上映したことがある。いまは亡き新劇人の杉山誠あたりが、「Jちゃん、頼むよ」とロハで見ていったりしたものだが、その小屋もとうに失くなってしまった。

「すっかり変っちゃいましたね。でも、街は、その変っていくところが面白いんです」

J・J氏はちょっと空腹を感じた。古本屋街の裏手にある「すずらん通り」に曲り、盧山飯店に入って、麻婆豆腐と焼売をオーダーする。

「神保町には十日以上も来なかったので、今日は五十冊ぐらい買えましたね。なかで十冊ほど、うれしい本がありました。珍らしくアメリカの現代詩人の、ハード・カバーの詩集がありました。おそらく北沢に、新刊見本として来たものでしょうね。ああいうものは注文しないと、なかなか手に入らないんです」

食事を終えて、「すずらん通り」を歩く。途中でふと目についた、抽象画をかざった画廊をひやかしたりしながら、こんどは、駿河台下の「大屋書房」に向う。

ここで買ったのは三冊。例によってバーゲン本で、『歴史と化した報道記事集』四百五十円、『ヘンリー・ジェームズの小説論』三百円、『シカゴの犯罪組織』五百円——

以上の四軒で、J・J氏が買った洋書は、軽く五十冊を越した。いつでもそうなのだが、「四、五十冊は買わないと、買った気がしないんです」——それでも払うお金は、高いときで二万円程度だ。

古書即売会の目録などを見ると、数万円、いや、数十万円もする稀覯本が出品されていたりする。しかし、その種の本がJ・J氏の興味をひくことは、めったにないだろう。かれが好きなのは、もっぱら現代作家、それも有名になるまえの、前途有望な新人の作品を掘りあてることなのだから。

ここらで、J・J氏流の「洋書の買い方」を紹介しておこう。

まず新刊だが、これは丸善、紀伊国屋、イエナの店頭で買う。店にない場合は、イエナを通じて取り寄せることになる。新刊本は主として、「ニューヨーク・レヴュー・オブ・ブックス」「カンゼーヌ・リテレール」「ロ

ンドン・タイムズ・ウィークリー」の書評欄で、見当をつける。注文した本は、一週間で五、六冊ずつ届くが、その代金たるや、古本五十冊分に相当する！

「古本を五十冊買えば、掘出し物が十冊はありますから、はるかに古本のほうが楽しいことになります」

古本の選びかたにも、J・J氏一流のコツがある。わざわざ買うこともあるまいと手控えていた本に、どこかの店でぶつかった場合、あるいは、まったく知らなかった本で、「これはいけそうだ」と第六感でひらめいた場合――こんなことはしょっちゅうあるのだが、見返しの値段をチラッと見て、安ければすぐに買う。

ものによっては、バカ高い値段のついていることがある。七百円くらいなら買ってもいいけど、千五百円ならやめる。新刊書の定価とあまりちがわないからだ。

だが、そういう本はいつまでたっても売れないことが多い。しばらくして寄ってみて、まだ売れてないと、千円ぐらいにまけさせてしまう。しかも数年前までは、J・J氏が目をつけた本は、あまり売れない――という「神話」が、神保町界隈で広く信じられていたから、値切るのも簡単だった。この「神話」は、最近になって、若い人たちがJ・J氏好みの本を買ってゆく傾向が増えてきたためにいつしか薄れてしまった。

さて満足できるだけの本を買い込むと、J・J氏はあまり混んでなくて、おいしいコーヒーを飲ませる店に入り、その日の成果を、ざっと点検することにしている。

目次に眼をとおし、最初の部分を少し読む。パラパラとページをめくって、「オヤッ」と思って立ちどまったりする。それで面白い本かどうか、だいたいの見当がつく。椅子やテーブルの上に堆く積み上げた本を、紐をほどき包み紙をはがして、コーヒーを啜りながら、一冊ずつていねいに調べてゆく。それがJ・J氏にとって、一日でもっとも充実した時間なのである。

昔は、その日の収獲を両腕にぶら下げて、渋谷までのんびり、都電で帰ったものだ。電車のなかで買った本のページを繰って、楽しんだりした。そして家に戻ると、こんどは夜中の三時過ぎまで、もう一度、面白そうなやつに眼をとおす。これはいまでも同じで、だから「翌日は眠くて困っちゃうんだ」と、J・J氏は愉快そうに笑う。

いつもなら、これから一誠堂や松村書店、ペーパー・バックスを揃えている駿河台の河村、それに崇文荘などにも立ち寄るところなのだが、きょうは時間がない。「大

屋書房」を最後にして、古いコーヒー専門店「きゃんどる」で、ひと休みすることにした。

J・J氏が「きゃんどる」に、ちょくちょく通っていたのは、もう三十年も前のことだ。「石川淳さんにも贔屓にしていただいて、和田芳恵さんがなにかの本で、石川一派の陰謀の巣なんて書いたこともありました」と、昔なじみのマスターが語る。

「最近は、作家も目録を見て注文するみたいで、掘出し物をさがしているすがたも、とんと見かけなくなりましたね」

大きくうなずきながら、J・J氏はコーヒー・カップに角砂糖を入れ、ゆっくりとかきまわし、ブラックで、ひと口ふた口啜ってみる。「やっぱりおいしいです」と、クリームを加える。コーヒーが来たところで、今日、神保町で買った本のうちめぼしいものについて、J・J氏の意見を聞いておくことにしよう。

エレイン・ケンダル『幸福な中庸性』

二年前に出版された、現代アメリカ批判の評論集。はじめ見たときは、未知の著者だと錯覚したが、解説に「ハーパーズ・マガジンやニューヨーク・タイムスの寄稿家」とあったので、「ああ、あの女流ジャーナリストの本か」と思い出した。定価は六ドル九五セントだったが、古本では六百円だった。

ジョン・A・ニーツ『アメリカの中学教科書の発展』

「おや、変な本があるな」と、J・J氏の興味をひいた本。植物学、代数、幾何学など、教科書の発展を写真入りで解説しているが、「これは腰を入れて読む本。すぐ読まなくても、買っておいてよかったとあとで思うことがあるでしょう」

ジュリアン・グリーン『他人』

フランスの高名な作家の新作。「一流中の一流の作家のものは、あまり読む気がしませんが、この小説は書評でも褒められていたし、新刊定価の三分の一の七百円だったので買いました。久しぶりに、グリーンの調子はどうかなと、読んでみたくなりました」

コニー・ファーバー『否定的空間』

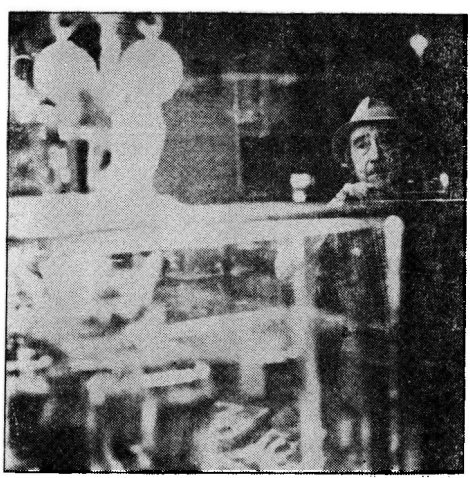
映画評論集。アングラ映画やマイケル・スノーの作品を扱っているが、J・J氏は以前、スノーの「波長」という実験映画を見て、すっかり感心させられたことがある。「ゴダールやブニュエルにも触れていますが、個性のある映画批評のように思えました。映画評論集は高い

ものですが、これは定価が三千円で、古本なら七百五十円だったので、買いました」

戦災で焼けてから、「きゃんどる」は店も小さくなって、場所も小宮山書店の脇を錦町方向に入った右側にかわっている。マスターは明治四十三年生まれ。J・J氏よりも三つ年下である。三十分後――「さて、出かけましょうか」と、J・J氏は腰を上げた。

（「宝島」一九七三年十一月号より）

海外読書散步



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.